

### 田中光顕関係文書紹介(5)

安岡, 昭男 / YASUOKA, Akio / NAGAI, Junichi / 長井, 純市

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

56

(開始ページ / Start Page)

27

(終了ページ / End Page)

43

(発行年 / Year)

2008-03-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003212>

## 田中光顕関係文書紹介（五）

安岡昭男  
長井純市

### はじめに

本号で紹介するのは、前号に引き続き田中光顕宛山県有朋書翰（巻之一四）巻之二十、二六通、未完）である。

今回紹介する書翰には、山県の和歌、漢詩の作品を田中に送ったものが目を引く。八七番書翰（明治四二年一月一三日付）、九〇番書翰（年月日不明）、一〇三番書翰（年代不明一〇月九日付）、一〇四番書翰（年月日不明五月二六日付）参照。すでに言及したように山県等は和歌、漢詩を嗜み、時折自作を持ち寄って批評し合う会合を催していた。

井上馨の伝記によれば、「長州の三尊」（後述）の中で、伊藤博文は漢詩に、山県は和歌に、井上は漢文にそれぞれ秀でていたという（井上馨侯伝記編纂会『世外井上公伝』第五卷、明治百年史叢書第五九卷、原書房、一九八六年、五三八―五三九頁、但し、井上の力量を明らかにするほどの作品が残されていないとも記されている）。山県の伝記には、山県にとって和歌は「政治家としての余技」に過ぎなかったが、「独壇場」

でもあり、伊藤における漢詩のように、「人格を向上せしめた」と記されている（徳富蘇峰編・述『公爵山県有朋伝』下巻、明治百年史叢書第八四卷、一一五七頁）。なお、伊藤の伝記、金子堅太郎代表・春畝公追頌会『伊藤博文伝』全三巻（統正社、一九四〇年）は、伊藤の趣味について何も記していない。

岡義武氏によれば、山県は和歌に長じた父親の感化を受けて幼いときから歌道に親しんでいたという（岡義武『山県有朋』岩波書店、一九五八年、四頁。以下、山県に関する記述は特に断らない限り同書に依る）。文久元（一八六一）年五月、英国軍艦が下関海峡付近を測量したことに憤慨して二十代前半の山県が詠じた長歌は、「豊あし原の八束穂の瑞穂の国は、千五百秋長五百秋と皇祖の神のよさせる国」と日本を讃え、一方、英国という「しこのえみしら」を「和田つみのそこの藻くづとなしてやまむ」との気概を示した古風な出来栄えとなっている。

幕末、第二次幕長戦争の際に、小倉口での戦いに奇兵隊を率いて勝利した山県の陣中での和歌に「黒けぶりたて、戦ふつゝの音のひゞきにもまたちるもみぢかな」というのがあがるが、彼の秀歌の一つとされている。

幕末に山県が認めたこのような和歌は、『葉桜日記』（一八九二年）、『越の山風』（一九三九年）に収められている。前者は、慶応三（一八六七）年五月に情勢探索の藩命を帯びて京都に潜伏した際の歌日記であり、後者は慶応四（一八六八）年閏四月以降、北陸、東北両地方を転戦した際の陣中生活を和歌と共に記した著作である。山県の作風は、西行、香川桂樹らを模範としたものであるという（前掲『公爵山県有朋伝』下巻、一一五七―一一五八頁）。

含雪という号も、こうした感受性が生んだものと見て良い。この号は、山県が椿山荘に転居する前、麹町富士見町の自邸から遠く富士山を眺望したことに由来するものである。

岡氏は、山県の詩人としてのこうした感受性は、彼が細かい神経の持ち主であったことと相通じるものがあると指摘している。すでに本紀要第五四号において言及した様に、山県の漢詩、和歌の製作における力量と、それらに表現された情感や感受性を理解することは、明治期における象徴的な政治指導者の一人について、いわばその原形質を探ることでもあるということである。

確かに、和歌や漢詩における山県の繊細な感受性は、彼の政治経歴における慎重且つ神経質な性格と一体のものであった。山県は、人に接するに寡黙、態度において謹厳であり、容易に打ち解けようとしなかったという。もっとも、この寡黙さは、一面、作為的でもあり、聞き上手を自ら演じたものでもあったという。とはいっても、いったん相手を信用すると驚くような機密事項も漏らした。こうした山県の態度について、岡氏は、結局において相手に利用されることを危惧したと共に、反面、

相手の利用価値を見極めようとしたからであると解釈している。そして、そうした態度は、山県の執拗且つ強靱な権力意志に結びついていた。その権力意志が「派閥の巨大な網状組織」を作り出したのであるという。山県の権力意志を示す一例として、明治四一年七月、第一次西園寺公望内閣が総辞職する際に、山県は西園寺首相に対し、人は権力から離れてはならない。それ故自分も権力維持に力を尽くしていると語ったというエピソードが残されている。

こうした山県の性格と好対照をなしているのが伊藤博文である。伊藤は、自分の能力と手腕に満々たる自信を持ち、それを誇り、表に出した。伊藤の目には、しばしば他人は愚かしく見えた。伊藤も人材の抜擢を試みたが、多くの場合、それは当面の必要を満たすためであり、そのあとはそれらの人々を顧みなかったという。そのため、伊藤は往々情に薄いと評され、山県のような大きな派閥的結合を生まなかったというのである。興味深い比較である。その様な意味で、「長州の三尊」の一人山県は唯我独尊の人物ではなかった。

さて、山県は和歌の指導を、時代順に、近藤芳樹、佐佐木古信、小出榮（号、柘園）、井上通泰らから受けた。このうち、小出、井上の両人は、江戸時代の歌人香川桂樹を祖とする桂園派に属す歌人である。もっとも、井上は桂園派を越えたという自負を有していたという（兼清正徳『松浦辰男の生涯』作品社、一九九四年。以下、特に断らない限り、記述は同書に依る）。したがって、山県も桂園派に属す素人歌人の一人といえよう。

小出、井上の両人は、山県の後援を得て、明治三九年、佐佐木信綱、

大口鯛二、森鷗外、賀古鶴所等と共に、歌道研究のために常磐会という組織を発足させた。同会は、毎月一回選者が三つの歌題を出し、門人から作品が集まると、選者一人に付き三〇首ずつ持ち寄り、作者名を秘したまま選者に二〇首を選ばせ、忌憚なく批評し、四人の選者のうち三人が賛成した作品を選とするという例会を始めた。この常磐会の会合が椿山荘や古稀庵で行われたという（前掲『公爵山県有朋伝』下巻、一一六三頁）。

小出繁は、高崎正風と親しくし、明治二五年宮内省御歌所寄人に任じられた。また、梶園社を主催して門人を育成した。井上通泰は、民俗学者柳田国男の実兄である。明治三年に東京帝国大学医科大学を卒業し、医業に就いたが、桂園派の歌人として大きな業績を残した。しかし、この桂園派は、明治後期に正岡子規や与謝野鉄幹から旧派として手厳しい批判を受けている。井上は、明治三九年八月に宮内省御歌所寄人に任じられたが、この人事には常磐会で親交のあった山県の後押しがあったといわれている。

なお、一〇四番書翰に記述されている高崎所長とは、明治二二年六月以来、明治四五年に死去するまでの間御歌所長を務めた桂園派の歌人高崎正風である。但し、山県は高崎の歌風になじんではいなかったようである。

井上通泰は、後年、山県の歌風を回想して、「身分のある歌人でもつて、あれだけよめる人は居ない」と評し、江戸時代の老中松平定信の力量に比している。とりわけ叙景に巧みであり、年齢を経るに従って新しくなったという。そして、山県は和歌を「国民思想の淵源」として見て

いたようだ」と回想している（入江貫一『山県公のおもかげ附追憶百話』偕行社編纂部、一九二二年、二四三―二五四頁）。

この他、主な書翰を時代順に取り上げておこう。

九六番書翰（明治二七年一月二三日付。この書翰は、前掲『公爵山県有朋伝』下巻、一八八―一八九頁に引用されている）は、日清戦争において天皇から直々に帰国命令を受け取った辛い気持ちを伝えたものである。山県における日清戦争については、すでに本紀要第五五号に詳述したところである。やむなく帰国することとなった山県は、「馬革」に自らの遺体を「裹」む覚悟で出征していたから、「優渥なる叡慮また奈何とも難致」く、「終生之遺憾」「進退維谷」との感情に襲われ、「別に臨みて、陣頭、涙、衣に満つ」こととなった。生涯「一介の武弁」を自称した山県にとって、何ともやるせない事態であったが、その反面、軍人として、こうした辛酸を経験することで、むしろ「一介の武弁」を謙虚に自称することとなったとも見られる。

八〇番書翰（明治三二年六月二七日付。この書翰は、前掲『公爵山県有朋伝』下巻、三三三頁に引用されている）は、第一次大隈重信内閣（いわゆる隈板内閣）の成立に際して、陸海両軍部大臣の人事について自ら考えを述べたものである。この内閣は衆議院において圧倒的多数を占める憲政党を与党とし、日本の憲政史上、初の政党内閣であった。しかし、あらゆる政党を排除しようとする原理主義的な超然主義を標榜し、やむなく政党の存在を認める場合でも三党鼎立論として政党間の牽制作用を期待する山県にとって、「遂に明治政府は落城」し、自らは「引退之外無之」「敗軍の老将」と映ったのである（前掲『公爵山県有朋伝』

下巻、三一九頁)。もちろん、山県の政治的氣力がここで衰えることはなく、陸海両軍部大臣の人事については天皇自らこれを行う様出来ないかと画策して、隈板内閣を牽制しているのである。結局、桂太郎陸軍大臣と西郷従道海軍大臣は留任とする詔勅が出されたのであるが、これを行うけて桂は親任式前に、徳大寺実則内大臣および岩倉具定侍從幹事立ち会いの下で、大隈首相兼外相、板垣退助内相の両人と会見した。席上、桂はやみくもな軍備縮小方針を取らないとする大隈の言質を取って留任を承諾したのである。この桂の動きが、前述の山県の工作を背景とする

と解釈することには妥当性があるろう。

八五番書翰(大正四年九月三日付)は、元老井上馨の死を伝えたものである。「世外」は、井上馨の号である。井上の臨終に居合わせることは出来なかつたようだが、山県は「英傑」を失つたと故人を追悼している。

井上は、俗にいう「長州の三尊」(長州閥の一人である品川弥二郎が最初に言い出したといわれる)の一人とされ、木戸孝允の亡きあと、長州閥をリードした伊藤博文、山県有朋と共に最も有力な政治指導者の一人に数えられていた。その怒声の大きさから「電光伯」「雷鳴伯」「ミスター・サンダー(Mr. Thunder)」などと綽名された。その一方、「三猿居士」とも称され、「見ざる、聞かざる、言わざる」の三猿主義を標榜したとも伝えられている(佐々木隆「明治政治家綽名つくし」、同編著『日本史話三近代・現代』山川出版社、一九九四年)。世外という号は、そうした氣質を表現したものであろう。

天保六(一八三五)年、長州藩の下級士族の家に生まれた井上は、幕

末に長州藩の尊王攘夷派の志士の一人として名を挙げ、外国公使館の襲撃に参加したりした。その後、藩主の許可を得て伊藤らと共にロンドンに渡航、短い滞在期間を経て帰国したのは、開国派に転じ、俗論党から命をねらわれ、九死に一生を得る経験をしている。幕末の政争を長州藩主流派の一人としてくぐり抜け、維新後は新政府の財政に力を尽くした。岩倉使節団の欧米訪問中、いわゆる留主政府において緊縮財政を提唱し、新制度確立をめざし予算拡大を要求する司法卿江藤新平等と対立、同調する渋沢栄一と共に大蔵省を連袂辞職したことは良く知られている。その後、明治九年には黒田清隆と共に日朝修好条規の締結にあたった。明治十年代、伊藤と共に不平等条約の改正交渉を担当し、初代伊藤博文内閣の外務大臣としていわゆる欧化政策、鹿鳴館外交を主導した。しかし、国内の批判を浴び、明治二〇年に外相の職を辞した。その後も、閣僚を歴任したが、第四議会では馬車事故で負傷した伊藤首相に代わって臨時代理を務めたこともある。日清戦後の第三次伊藤内閣での蔵相を最後に、それ以後内閣に列することはなかった。組閣の天命を受けたこともあったが、拜辞している(鳥海靖・高村直助他編『日本近現代人名辞典』吉川弘文館、二〇〇一年、井上馨の項、大江志乃夫稿)。

死去の前年、大正三年九月に第一次世界大戦が勃発すると、これを大正新時代の天佑と称したことは名高い。そのことばの真意は、日本の国運の発展を期し、国論統一、対英仏露三カ国との関係強化、さらに東洋における日本の利権確立を図ることにあった(前掲『世外井上公伝』第五巻、三六七―三六九頁)。

政治経歴全体を通じて、井上は、天保九(一八三八)年生まれ



と同一二（一八四一）年生まれの伊藤という年下の兩人の間を周旋し、仲介する役割を演じることも多かったが、一般に、伊藤と政治的歩調を共にすることが多かった。なお、この間、三井、藤田組（山県の邸宅椿山荘と藤田観光株式会社との関係は本紀要第五三号に記した通りである）の顧問を務めるなど、井上は実業界にも大きな影響力を有した。

井上は、すでに明治四一年に腎臓炎から尿毒症を発し倒れたことがあり、それ以来、健康に注意して暮らす日々が続いていた。大正四年九月一日、興津の別荘で、井上は尿毒性急性心臓麻痺を起こして危篤状態となり、死去した。その日、小田原から駆けつけた山県は、次のような和歌を霊前に手向けたという（前掲『世外井上公伝』第五卷、四三九頁）。

語らんと訪ひしを君は先立だちて残る老が身たのみなき世や

山県は、明治四二年一〇月、「長州の三尊」の一人である伊藤博文が朝鮮独立運動家の安重根の銃弾に斃れた際に、「かたりあひて尽し、人は先だちぬ今より後の世をいかにせむ」と歌って嘆くと共に、「死所」を得た伊藤を羨んだともいわれている。井上の死を迎えて、ついに、「長州の三尊」は、山県のみが残存することとなったのである。それまで三者間にはさまざまな政治的確執もあったが、井上の死に対する山県の悲嘆は、常に本音を明かす田中に対する書翰を見る限り、いわゆる外交辞令ではない。

井上の葬儀は、九月七日、日比谷公園の特設斎場で執り行われ、墓は長谷寺（現、東京都港区西麻布）に置かれた。井上の生涯を伝える墓誌銘は中原邦平と高島張輔の撰になる漢文で記された。法名は「世外院殿無聊超然大居士」といい、井上の生き様を表す法名となった。

現在、国立国会図書館憲政資料室には井上の元に残された夥しい数の史料群（井上宛伊藤書翰を含む）が「井上馨関係文書」として保管されており（未刊行）、日本近代史研究に供されている。

九一番書翰（大正七年八月二三日付）は、大正六年一月東京の麹町に落成した新椿山荘への転居について記されている。山県の邸宅椿山荘についてはすでに触れている。ここでは、山県の別宅について、まとめよう。

書翰末尾に山県の所在が記されていることがあるが、山県は、同時代の他の有力者と同様に、各所に別宅を有していた。大磯に小洵庵（明治二〇年）、京都の二条橋畔に無隣庵（明治二四年。のち日清戦争中に南禅寺付近に土地を改め、新たな無隣庵が明治二九年に落成した）、東京の小石川に新々亭（明治三五年、のち三井家に譲渡）、小田原に古稀庵（明治四〇年）と皆春荘（大正二年。山県没後は、後妻吉田貞子の別宅となった）、そして新椿山荘である。

書翰によれば、山県の誕生日の祝宴はそれまで賑やかに行われていたようであるが、新椿山荘ではそれを行わなかったという。書翰に記された和歌から判断すれば、山県も余命を意識している。この新椿山荘の由来を記した「新椿山荘之記」を漢文で記したのは高島張輔である（以上、前掲『公爵山県有朋伝』下巻、一一〇六―一一五六頁）。

実は、これらの邸宅、別宅は山県有朋に關係する史料の年代推定にも役立つている。

最後に、本史料の凡例について、これまでと同一であることを記しておく。また、本史料の編纂、校訂の作業にあたったのは安岡を中心とす

る田中光顕関係文書研究会のメンバーであり、その氏名一覧は本紀要第五二号に列記したが、ここに改めて紹介する（安岡昭男以下はアイウエオ順）。

安岡昭男、秋山りか、有山慎也、飯田直輝、出岡学、井上敦、岩壁義光、上田浄、柏木一朗、狩野雄一、川畑恵、河原円、小坂肇、斎藤智志、斎藤理津子、白柳弘幸、鈴木隆春、鈴木宏宗、須永真紀、高沢努、筑後則、土井康弘、冨塚一彦、長井純市、中川洋、中島英人（故人）、野崎雅秀、森口準、山下大輔、吉水暁、渡辺穰。

なお、今回掲載した史料の正確性については、これまでと同様に最終的に目を通した長井が責任を負うものであることを付記しておく。

### 山県有朋書翰（その五）

「含雪公手簡卷之十四宮内大臣時代」

以下、同卷所収の書翰

山79 明治（ ）年6月1日

昨夜は深更に及び候。御疲労さこそ不堪想察候。

扱、只今蔵相え之貴翰拝読。実に意外之御沙汰当惑至極に候。昨夜も御懇談に及候様、若此等之事情を以一面之進行を止候ては、一日と遷延如何とも難致事情を喚起し、遂には破裂に立到り可申とも深く痛心罷在候。急速進行之方針御下命相成候様御尽力所願候。

草急如此。頓首

六月一日

田中宮相閣下

「封筒」表、宮相閣下、内展。裏、緘。

山80 明治（31）年6月27日

昨夜は参堂御妨仕候。

扱、其節御話しに及候様陸海軍大臣辞表は、如思食不被聞届御沙汰と申事に候へ者、内閣組織之事、両伯へ御下命之節、陸海両大臣儀は御親裁被為遊候に付、取除組織可致との御沙汰無之而は不相成事と存候。此辺為念態と申進候。早々不尽

六月廿七日朝六時

有朋

田中老閣坐下

「封筒」表、青山老兄、密啓。裏、緘。

山81 明治（ ）年8月18日

先日は御来光を忝し深謝之至に候。其砌、相願置候鉄柵之事は、其後いかなる事情に立到り居候哉。若先方に必用之ものに候得者、勿論強而相望み候訳には無之故、其節申上試候程度に於て、情況相分り居候は、電話にて御一報可被下候。猶、京都出張所えも、何と歎不申遣候ては不都合に相成申間布や旁申試候。草々頓首

八月十八日

青山老閣坐下

椿山莊主朋

別簡返璧御収手可被下候也。

猶、老生も追々快方に立到り一兩日中外出可致覚悟に候。御懸念被下間敷候。草々乱毫高恕。

〔封筒〕表、田中宮相閣下、袖展。裏、緘、有朋。

山83 明治（ ）年11月7日

朝夕は殊之外寒冷相加候処、爾後御清適欣然。

山82 明治（ ）年9月22日  
肅啓 然は四大将親任一件御心配之末、只今御記名御下付相成候間、直に内閣へ送附候。横須賀行幸之義は今朝も相伺候得共、流行病云々天象未定云々を以而、未た不被仰出候。右御心得迄に一寸申入置候。勿々敬具

招魂祭日にて陸軍大臣病氣参列不致趣、只今伝承候間、今朝九時参拝致候間、今朝御約束仕候儀は御見合被下度。孰れ電話にて御見合時刻相定め可申候。草々頓首  
十一月七日

具定

田中老閣坐下

有朋

田中宮内大臣殿

敬読。不相變御多忙不堪想察候。

猶、若今朝御手誘にも候へは、参拝為相濟候て、貴官邸にて拝晤得候へは甚仕合申候。十字位には相成可申と存候。いか、や。  
〔封筒〕表、田中宮相閣下、親展内啓。裏、緘、有朋。

扱、四將軍昇等之事相運ひ候由、彼是高配を煩し多謝。又都筑之事、到底急速難被行情況何とも此余は陳情之途も尽果、遺憾之至に候。唯有志之者前途之方針如何。痛心此事に候。態と御内報を忝し深謝。草々復

椿山莊主頓首

山84 明治（31）年11月16日  
兵庫県知事より外国人雜居地御巡演之儀願出候趣に付而は、早速御上奏相成際に、飽迄貫通可為致御精神之段、知事に於ても深く感佩致居候処、艦隊司令官より時刻上申之上ならては不相運との事にて、聊懸念罷在候。此一事には、実に将来開国之御基礎、立と不立に關係不尠、何卒十五分時間之御さしくり、是非御許可被為在候て

青山宮相閣下



被仰出候様、老生よりも深く相願候。孰れ明朝拜光可申述候へとも、  
猶申上置候。早急如此

十一月十六夜

有朋

田中大臣閣下

〔封筒〕表、田中宮内大臣殿、親展内啓急。裏、緘、有朋。

〔含雪公手簡卷之十五〕

以下、同卷所収の書翰

山85 大正（4）年9月3日

先日は御来菴を辱し久しふり緩和拜承。本懐不過之候、多謝。

扱、世外翁病氣之報を得、直に訪問候処、既に他界之人となり実  
に遺憾無限候。於老兄も嘸かし御驚愕之事と察申候。老生は新秋に  
入候へは、面晤之約も有之候処、此国家多難之際如此英傑を失ひ、  
将来国家如何と憂慮不能措候。只、後輩諸子之猶一層奮発を所祈候。

于時一昨朝宮相に面会候に付、先日御内談有之候次第を陳述し、  
明治大帝陛下之御写真を陛下之御内覧に入、併而右之概要を上申致  
し、御内慮を相窺ひ候上にて、田中伯より御銅像製作之概要を認た  
る書面を添、直に宮内大臣に被差出可然事と相談致し置候付、今後  
之状況は、宮相歟又は老生より御一報可致と申談し置候。右御含置  
可被下候。

残炎猶甚しく、御自重為邦家専祈之至に候。草々頓首

九月三日

田中青山老兄侍史

古稀庵老主朋再行

猶、御大典には伯爵として御参列相成候方可然と宮相談話申承候付、  
其儘申置候。

乱毫高恕

〔封筒〕表、静岡県岩淵別荘、伯爵田中光顕殿、親展。裏、緘、相  
州小田原板橋、山県朋。

山86 a (大正) (4) 年9月13日付田中光顕宛波多野敬直書翰

謹啓 近来打絶御無沙汰申訳無之候。愈御佳適御起居被成候御様子、  
不堪欣賀之至候。

陳者、山県公へ御話之明治天皇御銅像見本各種拜見、内々供御覧  
候処、何等思召も不被為在候間、可然御撰扱可被成。猶、奉建場所  
之儀は、其筋へ御交渉相成候様致度候。

時下御自愛專要に奉存候。敬具

九月十三日

敬直

田中伯爵閣下

追敬 本文見本四枚御預り申置候。御入用に候は、早速返上可致  
候。

山86 b 大正（4）年9月18日

雲箋敬読、益御清勝欣然。

扱は、御銅像奉献之通知宮相より有之候趣を以御報道を忝し多謝。

別紙は直に御返却御査収可被下候。草々復

九月十八日

古稀庵老主朋頓首

田中老閣侍史

〔封筒〕表、静岡県駿河国岩淵別荘、田中老伯閣下、親展。裏、緘、

相州小田原板橋、山県朋。

〔含雪公手簡卷之十六宮内大臣時代〕

以下、同卷所収の書翰

山87 明治(42)年1月13日

鶏

沓、十二、廿四、廿七の四首を撰ひ候。新年に關係の歌は季には拘はらざるものや。点者之説如何。老生は除きたり。

葉落月明

三十四、三十八、五十一の三首を撰に入候。

三十一の歌は軽妙なれ共、

しらすりし庭の植木の蜂の巢のあらはにみえて冬枯にけり

と読たる小出翁の歌なり。暗合なれ共可惜。

三十六の歌も亦おもしろし。大家の歌に類似したる嫌マひある様覺ふ。

諸先生為如何。

太刀

五十八、六十九、七十四の歌を撰ひ申候。

古稀庵主妄評

三十六、霜やおくの歌おもしろく感候。然れとも、中古以後近世大家の中に、甚た似より候もの有之やに覺妄評致し置たれとも、諸先生マの記憶マに感しなれば、当撰の部に入置べし。

鶏

五、廿二兩首。

葉落月明

三十六、五十一兩首。

太刀

五十八、六十兩首。

或人の妄評、序ながら書加候。先刻一書さし出し申置候得とも、重而開陳致し候。都門頗寒威凜烈之由、当地も平年よりは一層森嚴に候。御自重所祈候。草々不悉

沓月十三夜

古稀庵朋頓首

青山老伯閣下

〔封筒〕表、東京市麹町区一番丁官邸、田中宮内大臣殿、親展急啓。

裏、小田原古稀庵、山県朋。

山88 明治( )年9月( )日

御繁多不堪想察候。

扱、内閣継続之事は、如何之状況に立到り居候や。目下清国変乱に關し、一日も忽に付すへからざる形勢に付、十分御尽瘁被下、片時も速に内閣組織相成候様懇願之至に不堪候。一昨日来之概要御示し被下候へは幸甚。草々頓首

九月卅一日

椿山莊主

青山老閣坐下

对客中乱毫高恕。

〔封筒〕表、田中宮相閣下、親展内啓。裏、緘、有朋。

山 89 明治（ ）年10月29日

今朝者御来光被下忝深謝。先日來御談話可致含なから、又今朝も失念致し候。余之儀には無之、去る七月於御官邸御内話に及ひ置候様、曾而御貸渡し致候東南之土地、此度境界を旧形に復し可申と存候。就而は、草樹植換等之御都合も可有之に付、來春までに御取片付相成候様所願候。

猶、執事之御命し置可被下候。当度縷々情話を尽し候心事に不外候。為其。草々不宣

十月廿九日

椿山莊主朋頓首

青山田中老閣坐下

〔封筒〕表、田中宮内大臣殿、袖展。裏、緘、有朋。

山 90 (明治) ( ) 年 ( ) 月 ( ) 日

秋香歌為曾祢書記官長作

東籬香色冠秋葩、培養最難亦此花、

曾君園裏多佳種、苦心擁護洵足誇、

品題未上前人譜、(南安以後作菊說者數家)

歌詠我今欲為古、金盃玉毳粉鶴翎、(三種皆菊品見花鏡)

比擬從來隨意評、君独名之不佞物、

命以故園勝地名、指月山臨花江水、

荒苑添離感旧址、太古湾接鯉鱗橋、

童時遊嬉記甲子、扇墜之瀑雪灑紈、

筆染之川墨流紙、螢火照山光陸離、

羽衣飄野影披靡、晴暎射翠阿武松、

寒蟾浴波玉江里、鶯谷牛莊曉烟凝、

鶴台姥倉晚霞綺、山河千里尽秋色、

对花憶起父母国、欽君居官常理煩、

余暇能致栽培力、開筵賞鑒会良朋、

香影深处酒如漚、花映杯罍秋方好、

夢裏三徑風霜老(左傍杜園者為菊名)

校正 張輔拝稿

〔封筒〕表、田中賢兄、有朋、別詩稿在中。

〔含雪公手簡卷之十七〕

以下、同卷所収の書翰

山91 (大正) (7) 年8月23日

残炎難凌候処、倍御清適欣賀之至に候。

扱、先日は雲箋拝誦候処、折節俗事に取紛れ今日まで疎情に打過、高恕是祈候。近來は頗る御老健の由敬賀不啻候。誠に御繁榮之吉報を承り不堪羨望候。老生は昨冬新椿山荘に転居し、今年の誕辰日には知己旧友の集合も不致、左に一首を及披露候。

なからへはところかへてもいはひてむいくすえみるに時をえらひて

御一笑可被下候。于時出兵の時機に際し近來未聞の騒動を惹起し、此人心を一新するには当局はいかなる処理を可致哉。帝国も亦世界大戦の渦中に入ながら此状態に立到たるは内外に對しいかにも遺憾痛歎の至に候。残熱御自愛、為國家專祈の至に候。草々復

八月廿三日

函麓草廬庵主册

青山田中伯老台坐下

乱毫御推読。執筆年々困難に立到候也。

〔封筒〕表、静岡県下岩淵別荘、伯爵田中光顯殿、親展。裏、緘、相州小田原板橋、山縣朋。

山92 (明治) (41) 年1月28日

雲箋敬誦。弥御清適遥賀の至に候。

田中光顯関係文書紹介(五)

扱、詠草拝見、如例妄評相試み、則別詠草さし出し申候。御查收

可被下候。妄評後密封被入披見候処、高詠四十二之歌を撰び申候。四十七之高詠と孰れを入撰可致かと考慮を尽したれ共、真情さもあるべくと前のうたに決し申候。如論函麓者頗暖氣にて殆如春日景況に有之候。不便の地も早春旁來訪者不絶、意外之感を生し申候。去なから此節よりは煙水伴閑鷗可申と相楽居申候。寒威御自重、為邦家所祈候。草々復

一月廿八日板橋

青山老伯閣下

古稀庵主册頓首

猶、松寿院殿薨去に就而は沼津え候候可被致事と察候。御往來御出相待申候。草々

〔封筒〕表、東京麹町区一番町二番地官舎、田中宮内大臣殿、親展。裏、緘、相州小田原板橋、古稀庵主册。

〔含雪公手簡卷の十八〕

以下、同卷所収の書翰

山93 明治( ) 年6月21日

入梅之節一日も快晴所祈候。

扱は今朝或友人より差送候付荔枝両三顆乍些少送呈、風味御試可被下候。風枝露葉如新採、宮中華人一破顔之句、風味淡泊にして詩句も亦可味事に候。草々頓首

六月廿一日

含雪

田中將軍幕下

「封筒」表、田中少將殿、内敬復。裏、山縣朋。

山94 明治（ ）年（ ）月（ ）日

邦家基存一身基

延及万機豈復疑

誰知春風花百樹

総原霜雪烈寒時

「封筒」表、田中將軍幕下、荔枝一包添。裏、有朋。

山95 明治（ ）年12月24日

今日は妙な事より閑雅なる遊び相催候に付、乍時御来訪相待居申

候。草々頓首

十二月廿四日夕

含雪

青山老兄

「封筒」表、田中將軍殿、内啓急。

山96 明治（27）年12月13日

数回之尊牘忝落手。弥御清康欣然。

扱、其後満州地方敵状もさしてかはりたる事も無之、海城并に托

木城等に数千之歩騎兵屯集、頻りに防禦策を旋し候に付、第三師団

を以海托両城攻撃之命令を下し、過る三日より進軍。老生も亦大孤

山を經岫巖に向ひ出陣可致含にて、病後未不可跨との事故、路を海

上に取り進行之途中勅使に出会帰朝可致様御沙汰之旨拝承。老生終

生之遺憾此事に候。然れとも優渥なる叡慮また奈何とも難致、殊に

氷結之期は目前にさし迫り、進止維谷之地位に陥り、遂に攻守之部

署を定め両師団長に訓令し、去る九日発途、耳湖浦より乗船、昨日

仁川港に一泊、今日拔錨、馬関に向ひ可申覚悟に候。老生先月初旬

より胃病にて一時は多少困難致し候得とも、其後追日快方に赴き今

日は殆と平常に異ならざる容体となり決而御懸念被下問布候。石

坂軍医を始諸老。家大に打驚きたる趣にて橋本国手えの報告其他、輕

からざる容体に相聞、諸友えも不一形高配を煩したる次第は老生の

耳底には寸毫も聴へ不申、岩井国手到着にて委曲事情伝承、誠に面

目も無之、其末帰朝の命を蒙り実に千古之遺憾に候。左之一詩供高

覽候。

馬革裹屍素所期

出師未半豈容歸

奈何天子召還急

臨別陣頭涙滿衣

満州在陣示両師団長 芽城山人朋

老生之心情御憐察を願候。先日は令夫人より御送恵物難有、殊に鯛

味膾は病中非常なる嗜好物となり、毎度二宮生と相話し喰事を勧め



申候。于時順安より一書呈進之中に大城戸某之書簡を送致候処相届  
き候や。若未たならば猶詮儀を試み可申と存候。

含雪

寒氣日々凜冽、御自重千金。野郎、品川、三浦、三好、滋野、兎玉  
其他諸君え病氣に付而之厚配を謝し候段御致意可被下候。草々不尽

十二月十三日朝鮮海上に認

椿山莊主芽城山人朋

芭蕉庵主青山將軍幕下

猶、令闈へ可然御致声所願候。再白

〔封筒〕表、芭蕉庵主青山老台、袖展。裏、緘、椿山莊主人。

山97 明治（ ）年12月2日

如何御暮し被成候也。明日早天自近傍野外え散歩旁速騎相願度、  
此程自不氣分勝にて聊精神陪マツ養仕度覚悟に有之候。御都合如何と申

試候。草々頓首

十二月二日

含雪

青山老兄

〔封筒〕表、田中少將殿、内啓急。裏、山県朋。

山98 明治（ ）年12月31日

歳晩は却而御清閑と察申候。就而者市街の景況連騎一見被思召立候  
ては如何や申試候。草々頓首

十二月尽日

青山老兄

〔封筒〕表、田中少將殿、内啓急。裏、緘、山県朋。

〔含雪公手簡卷之十九〕

以下、同卷所収の書翰

山99 明治（31）年10月17日

秋気日々相加候処、爾来御清穆敬賀。伊国皇族御引受も無事相済  
候由、此節は常務に服し候事歟と察申候。乍去又天長節観菊会等に  
て御多忙之時機に立到り可申、暫時之御静間マツにても精神培養の工夫  
念頭に被懸度は折候。

扱 皇太子殿下にも無事御着京被為在候処、為差事には無之候へ  
とも御風氣にて未御外出無之、昨日伺候仕候処、別段御発熱も無之  
に付、明日比には加茂社、泉涌寺等え御参詣可為在との事に候。于  
時皇太子殿下御昇進後已に数年を経過せしやに相覚居候。果して然  
らは天長節に於て少佐に昇等可被仰出時機歟と存候。勿論、陛下思  
召も可被為在候へとも、一兩年相立候得は今日之地位にては御昇進  
被為在可然歟と察申候。甚突然に候へとも鄙見及内申候。老閣にも  
篤と熟慮之上御上奏御試み相成ては如何。先は為其草々。餘事在後  
鴻。時下為君国御自重専祈之至に候。不宣

十月十七日京都

無隣庵主朋頓首

青山老閣坐下

〔封筒1〕表、東京麹町区老番町老番地、田中宮内大臣殿、親展。

裏、緘、京都南禅寺前草川、山県朋。

〔封筒2〕表、青山田中老兄、内啓。裏、緘。

山100 明治（）年12月17日

朶雲落掌。益御清福万賀。

扱者、東宮妃殿下御妊娠の旨被仰聞深謝。実に皇家之御繁栄御同慶之至に奉存候。曾而京釜鉄道架設に付帝室より御持株之事御談合致し置候処、其後御詮議振如何相運ひ居候や。此際多少に不拘御持株御裁決相願度候。京釜一貫之鉄路は両国商業上非常之發達を可期は必然に候。随而将来我国之利益不尠而已ならず政軍略上に於ても国家安泰を維持する効力又不可測知。此一事件は為國家御断行所願候。鉄道之性質より論すれば新領土とは主義を異にするも利害は之と同するものと判断せざる可らず。就而は一般之奨励を要する為十分御尽力祈居候。老生避寒之事に付橋本国手之勧告最も至極に候。如貴論大磯、鎌倉辺は煩雜を極め到底静養の地には無之実に御同感に候。草廬寒威凜冽を極め、健康を害するに到れば舞子辺にても転養可致歟と存候。

春畝首相帰京の由、議會開設前彼是多忙之時期、十分静養も尽し難き事歟と病後甚懸念致し候。御晚餐会後夜半之華墨一覽、老生も亦思起し神心に徹候。実に御多忙而已ならず又精神之疲労いかはかりかと不堪想察候。先は為其草々。寒氣御自愛專一に存候。不宣

十二月十七日京都

無隣庵主朋頓首

青山將軍幕下

猶、發起人より之書簡供清覽候。再白

〔封筒1〕表、東京麹町区富士見町一丁目官舎、田中宮内大臣殿、

親展。裏、緘、京都無隣庵、山県朋。

〔封筒2〕表、青山老兄、内啓。裏、緘、有朋。

山101 明治（）年7月15日

過日来、日夜御多忙に候処、昨今は多少御手透に相成候かと察申候。如何の御都合に有之候や。明晚明後日に掛、芭蕉庵に御静養旁御来駕相成可申歟。孰之場処にても可然に付、篤と御談合致度事件不少、時日御取極め御一報所願候。為其。草々頓首

七月十五日

椿山莊主朋

青山老兄坐下

〔封筒〕表、麹町区老番町一番地、田中宮内大臣殿、親展。裏、緘、

小石川区芽城台、山県朋。

〔含雪公手簡卷之二十詠草入〕

以下、同卷所収の書翰

山102 明治（）年（）月（）日

密啓、兼而御内話有之候穂積儀、今春は枢密院書記兼官を辞候  
(数年来差留有之候事に候)。就而は如何兼任之事此際御決行相成候

は、好都合と存候。草々

〔封筒〕表、田中宮内大臣殿、必親展。裏、緘、托高崎氏、有朋。

山103 明治( )年10月9日

爾来倍御清壮欣然。

扱、三好中将も遂に遠逝、遺憾之至に候。薨去之節は彼是高配を  
蒙候段、野村子より報道有之深謝。老生は静養中何之助力不致恐縮  
之外無之候。草盧着後は日々溪水緑樹之間を逍遙し養生罷有。乍余  
事存懐是祈。併、当夏以来之耳疾于今諷波理無之、依而先日賀古国  
手当地来診、大坂専門医と談合候処、目下為差事も有之間布との事  
にて、依旧治療を施し居申候。病勢増加せされは来春迄滞養致し度  
心算に候。此辺御含置可被下、尤他えは何等取極めたる事未不申遣  
候。

扱は都門之光景無事寧静、為国家大賀之至に候。先日江州辺処々  
に漫游、永源寺に到候処、山水風致は小景ながら一勝地に候。左に、

山はみなもみちの秋となりにけり楓のみかは椽も桜も

帰途彦城一泊、所得之一絶、

数行過鷹落□辺 舟入紅林横昏烟

賤岳叡峰秋一色 琵琶湖上水如天

笑去所願候。比日は交際之時期、内外御多忙不堪遠察候。寒冷日々  
相増御自重為皇室専祈之至に候。草々不宣

田中光顕関係文書紹介(五)

十月九日京都

無隣庵主朋頓首

青山老閣坐下

猶、令聞え可然御致意可被下。先日者土地之事被仰越了承。留守可  
然頼居候。再白

〔封筒〕表、東京麹町区富士見町一丁目官舎、田中宮内大臣殿、袖  
展。裏、緘、京都南禅寺畔、山県朋。

山104 明治( )年5月26日

拝啓 近來は来賓引続、終始御接待等頗御繁忙不堪恐察候。

扱、明日高崎所長賀宴御催有之趣に付、当日之兼題一首相認め短  
冊一葉さし出し申候。老閣御出席之序を以所長え御渡被下度相願候。  
余事期拜光可申候。草々頓首

五月廿六日

椿山莊主朋

青山田中老閣坐下

台湾鉄道縦貫線全通式を祝ひて

きたみなみかなちひらけて西東人もたからもつとひきにけり

奈良原男爵か台湾神社に太刀を納めしとき、て

御社に納めし(つる)太刀はつかのまも君をわすれぬしるしなる  
らむ

六連島

おもふとちかたりあひつゝ六連島すきゆくふねのうちそたのしき  
八重島

九重の雲ぬしつけきしるしにや八重のしほ路も波なかるらん  
島かけはきのふもけふも見えぬかななみのはなのみさきみたれ  
つゝ

片岡男爵の病床にあるをおもひて

やみふせる都のともをおもふかなかりの羽かけもみえぬしほちに  
台北にて

われをおくる人のこころやいかならん汽車のけふりのあと見えぬ  
まで

五島

をちかたに雲とみえつる女男のしまわかれていまはかけたにもなし  
明治四十一年十月十六日台湾に赴かむとせし時、故能久親王  
妃殿下より高砂の島にわたらは朝夕にかはる氣候をこころせ  
よ君といへる御歌をたまはりければ

わすれやめ秋きりふかき海山にこころせよとの君か言の葉  
車上にて

秋のたのみのれるけしきみつゆけはたひちのうさもわすられに  
けり

雲のかゝりて富士の見えさりければ

ちきりおきしいもにあはさる心地せりふしのたかねの見えぬたひ  
ちは

山畑

あしからのかなちにもへる山はたに柿いろつきてそはの花さく  
十八日神戸を出たつ船中にて

夕日かけうすれうすれていまははや須磨も明石も見えずなりにき  
京都にて篠田時化雄に

八島

はしりゆく汽車のたひちのかなしさはほとんどおもふ人もとはれず  
あつさゆみやしまのおきにいりかゝる夕日のかげの□くもあるかな  
赤馬関にて

まこころのあかまかせきに国のためたゝかひしよをしのふけふかな  
小門といへる所に石田静逸か草庵をしつらひしに高杉東行の  
夕棹舎と名つけることとおもひ出て、

ほことりて名月に棹さしゝむかしかたらむ友もなきかな  
文字ヶ関にて人に書をこはれければかきて

きみかためいまかきなす水茎のあとなどゝめそ文字か関守  
釣魚

いろくつはつるもつらすもおもしろしかかぬけしきに船をうかへて  
えしうをはちいさけれともこゑのみはおとろくはかり大きかりけ  
り

響の灘

うつなみのおとはしつかにきこえけりひゝきのなたと名にはたて  
れと

三十六湾

めにあかぬけしきなかめて三十あまり六のうらわをけふすきにけり

沖の島

ますらをのつゆのいのちを沖の島波とくたけしことのかなしき

(x)

うちよせてつひにかへらぬ仇波にたもとをしほる沖のしま山

馬関にて

するすみのいろよりくろく見ゆるかな硯のうみにたてるけふりは

〔封筒〕表、田中青山老閣、親展。裏、緘、短冊相添、有朋。